

日本語学習者の母語がトピックの持続性に与える影響

—作文における談話構成の観点から—

遠山 千佳*

要旨

本研究では、英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者、及び日本語母語話者の作文を対象に、それぞれのトピックがどのように維持され終結する傾向があるのか、Givón(1983 他)による「トピックの持続性」という指標を用いて分析した。その結果、類型論的に日本語に近似している韓国語母語話者には正の転移の可能性があること、類型論的に日本語と離れている英語母語話者は「は」標示と「が」標示のトピック性に区別があまりないことが示され、談話の構成に影響を与えていることが示唆された。

キーワード: トピック性、語用論的機能、言語類型論、トピックの持続性(Topic Persistence)、「は」標示と「が」標示

* 立命館大学 大学院 言語教育情報研究科教授

1. はじめに

1.1 問題の所在

日本語学習者の作文活動において、読み手にわかりやすく伝えるための構成をある一定の定式として提示され、それに従ったとしても、書き手が意図した構成のように受け取られるとは限らない。書き手が内容的なまとまりと考える部分と読み手がまとまりであると認識する部分に齟齬があつて内容が理解されにくかったり、全く関係のない内容が並べられていると感じられたり、内容の流れが行きつ戻りつして意味が把握しにくかったりする場合がある。文レベルでは単位として認定しやすく、文法の形式と意味のマッピングもある程度までは正誤が明白で、学習者に明示的に示しやすいが、このような談話の構造にかかわる問題は、内容のどこからどこまでを一つの単位として認めるかが書き手や読み手に委ねられており、明示的な知識としての学習が難しく、学習者にとって意識化されにくいと考えられる。

談話は、内容的なまとまりがトピックとして展開したり終結したりしながら構造化されていく。つまり、談話構造を意識化するためには、トピックが何であるかを意識して文章を書いていく必要がある。しかし、一つのテーマに対していくつかのトピックがある場合、それらのトピックをどのような順序でどの程度詳しく述べて次のトピックへ移ればよいかは、無意識に選択されていることが多い。また、言語やジャンルによって典型的な文章構造は異なると考えられ、第二言語学習者にとっては、母語で書くとき以上にさまざまな要素を考えながら文章を作成しなければならない。特に高等教育機関において日本語で学位を取得することを目的としている留学生は、日本語で論理的なレポートや論文を書く必要があるが、そのためには正しい文法を身につけて文単位で正しく産出できるだけでは十分とはいえず、読み手に理解しやすいように談話を構築していかなければならない。

学習者が可視化しにくい談話構造を捉えるためには、導入したトピックをどのように展開させていくか、またどのように現行のトピックを終結して次のトピックに移行していくか等、トピックの流れを意識化し、その流れが汲み取れるような表現をする必要がある。しかし、学習者の母語と第二言語としての日本語で理解しやすい談話構造に違いがある場合には、読み手が理解しやすい文章を最初から作成することは難しいことが予想される。そのような場合、トピックの流れを可視化する手がかりとなる表現方法が提示されると、トピックの流れを意識化する際に役立つのではないだろうか。また、そのような手がかり(表現方法)を効果的に提示するためには、まず学習者の作文談話の傾向を把握しておく必要がある。

1.2 類型論的観点によるトピックの問題

「トピックとは何か」という問題は今日までも議論され続けているが、定義を明確に述べることは難しいとされている(Givón, 1988; Myhill, 1992; Odlin, 1989)。Li & Thompson (1976)は主語とトピックのどちらが卓立しているかという観点から、主語が必須の主語卓立型(英語など)、主語ではなくトピックがコード化されるトピック卓立型(中国語など)、主語とトピックの両方がコード化される主語・トピック卓立型(日本語、韓国語など)、主語もトピックも卓立しない型(タガログ語など)の4つの類型に世界の言語を分類し、主語とトピックが談話内でどのようにコード化され、卓立しているかが言語によって異なることを示している。また野田(2004)はトピックを表す手段に音声的手段、文法的手段、形態的手段があるとし、言語によって典型的なトピックの表現方法が異なるとしている。トピック化に形態的手段を主に用いる日本語においては、古くから情報の流れが「は」や「が」の助詞で語られてきたのに対し、トピック化に音声的手段を主に用いる英語の談話を対象に、Chafe (1993)が情報の流れをイントネーション・ユニット、アク

セント・ユニットという韻律との関係で述べていることも、トピックのコード化の手段の違いからくる一つの現れであると考えられる。以上のようにトピックといっても言語によって捉え方が異なる。日本語では、「は」はトピックを表わすとされているが、日本語学習者にとって『「は」はトピックを表す』という説明は、それでは「トピック」とは何かという循環的な問題を生じさせる可能性がある。

そこで本研究では、母語の異なる学習者が作文に導入したトピックをどのように維持し終結していくのか、学習者の母語別にトピックの流れの傾向を把握し、日本語教育における作文教育への示唆を得ることを目的として、作文の分析を行うこととした。

13 日本語のトピック表現

日本語は、Li & Thompson (1973)の分類では主語・トピック卓立型言語と言われており、主語とトピックの両者がそれぞれ助詞でマークされている。書きことばにおけるトピック表現にはさまざまな表現が存在するが、もっとも多く使用されるのは助詞の「は」である。主語は「が」で標示される。しかし、主語となる名詞句を「が」で標示するか、トピック化して「は」で標示するかは、その談話で述べようとしている筆者の意図に左右され、日本語母語話者でもどちらを使用すべきか迷うことが多い。それは、「は」と「が」が主語、主題という基本的な機能を担いながら、談話においては、主語や主題に内在する語用論的機能がはたらいっているためであると考えられる。柴谷(1989)は「は」と「が」の機能について、語用論的特性がそれぞれの文法的特性から導き出されるとしている。つまり、主語と主題という文法的概念だけでは、文脈における主題(「は」)と主語(「が」)の機能は説明できず、日本語学習者が日本語で作文を書く際に問題となるのは、文脈がかわる「は」と「が」の語用論的機能であると考えられる。またこの語用論的機能は文脈によってさまざまな意味をもって現れるため、学習者は「は」と「が」の語用論的機能を、文脈との関係から推測する必要がある。目の前に相手かいない文章では、非言語的な補助もなく、トピックの流れと「は」と「が」の使い分けの関係を把握することは、学習者にとって可視化できないマッピングの習得となり、難度が高くなると予想される。また、日本語母語話者が「は」と「が」の使い分けについて迷うという事実は、「は」と「が」が対立するものではなく、連続体として存在するものであることも示唆しており、そのことも文脈における「は」と「が」の使い分けの習得難度を高めることにつながっていると考えられる。

トピックを連続体として捉え、談話の中の指示対象に対して「トピック性(topicality)」という概念をとり入れたのが Givón (1983 等)である。Givón は名詞句のトピック性を数量によって表す指標を提示している。数量による指標は、絶対的なものではないが、傾向を把握しやすい。そこで、本研究では、Givón のトピック性の考え方を援用し、日本語学習者と日本語母語話者の作文における主語の「が」と主題の「は」のトピック性を測定し、その特徴と作文内容(文脈)からトピックの流れを質的に分析することを試みた。

2. 先行研究

2.1 トピック性(topicality)

Givón (1983)は、談話における名詞句について、想起のしやすさ、注意の量という段階的な心的パラメーターを用いて、「トピック性(topicality)」を数量的に示す方法を提示している。具体的なパラメーターとしては、先行文脈の同一指示語との連続性(Topic Continuity)の程度を示す「指示距離(Reference Distance)」、トピックの重要性を示す「トピックの持続性(Topic Persistence)」という2つの指標である。「指示距離(RD)」は記憶に関わる指標として、あ

る名詞句の同一指示語が先行文脈のどこに出現していたかを示し、導入されたトピックとしてどの程度認識しやすいかを示す。「トピックの持続性(TP)」は注意の量に関わる指標として、対象名詞句が後続の文脈にどのくらいの頻度で出現するかを示し、トピックの重要性を測る指標となる。Givón は、これらの指標が直接的に認知的側面を意味するものではなく、トピック性を直接評価するものでもないが、主観的になりがちな談話の分析において客観的な手がかりを提示し、課題発見を促す指標となるとしている(Givón, 1984, 1995)。また中浜(2009)は機能主義言語学の考えとして、指示対象トピックの適切な導入・維持が物語談話の一貫性向上につながる一要因であるとしている。

2.2 第二言語(L2)の談話における名詞句の導入と維持

では、母語とは異なる体系をもつ第二言語の談話において、学習者はどのようにトピックを維持したり移行したりしているのだろうか。

日本語のトピックの連続性、持続性については、中浜(2009)が日本語学習者のナラティブを分析している。その中のフォローアップインタビューの結果から、学習者は「は」と「が」について、英語話者は中級では3名中3名が区別をしていないが、上級になると3名中2名が「は」と「が」の用法について言語学的知識を持っていること、韓国語話者は中上級5名全員が韓国語の助詞を対応させて使用していたことが報告されている。中浜はこの結果について、英語話者のように母語に対応するものがない言語項目を習得する場合は、長年の学習と肯定的・否定的証拠にさらされることで談話における適切な「は」と「が」の使用ができるのではないかと考察している。また、トピックの導入・維持を分析した結果、類型論的に日本語と類似している韓国語話者はトピック管理の仕方の習得が早く、類型論的に異なる英語話者では中級では「は」の過剰般化が見られるがレベルが上がると日本語母語話者のトピック管理のパターンに近似してきたとし、トピック管理の仕方が母語の影響を受ける可能性があるとしている。

渡辺(2003)では非母語話者のトピック管理の仕方が日本語母語話者と異なるとしている。渡辺は、ストーリーを語る際に登場する人やものを指示する表現形式、その表現形式とエピソードの推移や談話の意味的なまとまりとの関係を、日本語母語話者と非母語話者によるナラティブの談話データを対象に分析している。その結果、一つのまとまりある場面の中で、日本語母語話者が主体となる関与者を一貫して「が」格で表現し、授受表現を使うなどして主体が一定となるようにしているのに対し、非母語話者は動作主が替わるたびに新しい動作主を「名詞句+『は』」で導入していたとしている。そのため、非母語話者の談話では、場面の一貫性が損なわれ、誰が主要な登場人物であり、誰が副次的な登場人物であるかが分かりにくくなってしまっているという。

このようなある程度の長さのある談話において、日本語学習者が指示対象をどのように表現するかという研究はまだあまりなされていない。

Sasaki(1997)は、Givón の指標を用い、英語学習者の発話におけるトピック性を分析している。アメリカ在住の日本語を母語とする対象者1名に対して行ったインタビューデータを英語学習者データとし、先行研究の日本語母語話者と英語母語話者による発話データと併せて、ゼロ照応、代名詞、完全名詞句(full NP)の3種類の名詞句の頻度、「指示距離(RD)」、「トピックの持続性(TP)¹」について比較を行った。その結果、主語名詞句のうち、代名詞の頻度の割合が、英語学習者と英語母語話者はどちらも60%前後ではほぼ同じ頻度であったのに対し、日本語母語話者は7.1%のみであった。一方、ゼロ照応については、日本語母語話者の頻度が65.8%で高いのに対し、英語学習者は1.8%、英語母語話者は15.8%と低い値を示していた。この結果は、主語名詞句の種類として、英語母語話者にとっては代名詞の使用頻度が高く、日本語母語話者はゼロ照応の使用頻度が高いことを示しており、英

語が主語卓立型言語(Li & Thompson, 1976) で主語をゼロにはできないのに対し、日本語ではゼロ照応が可能であることを反映していると考えられる。英語学習者は代名詞の使用は英語母語話者に近いものの、ゼロ照応に関しては日本語母語話者とも英語母語話者と異なる傾向を示しており、日本語(学習者の母語)と英語(学習者の目標言語)の言語類型論的特徴の影響を受けていると考えられる。また、トピックの持続性(TP)の値については、ゼロ照応、代名詞、完全名詞句ともに、英語学習者の値は日本語母語話者、英語母語話者の両者と離れていた。これらの結果をもとに、Sasaki が対象とした英語学習者のトピックの導入と維持の仕方は、どちらかという英語母語話者のシステムに近いものの、日本語からも英語からも独立したシステムをもっているとされている。

以上のように、談話におけるトピックの導入や維持の仕方は、「は」や「が」などの名詞句の標示の仕方、代名詞やゼロ照応などの名詞句の種類など、さまざまな面から観察されているが、その指示表現には母語や学習者言語が影響していることが示されている。しかし、日本語の談話における指示表現に対する母語の影響を調査した研究は少数である。本研究では、日本語の作文談話において、一つのテーマについて述べるにあたり、トピックをどのように維持したり、終結したりするかを焦点をおき、Givón による「指示距離(Reference Distance)」と「トピックの持続性(Topic Persistence)」のうち、トピックの維持、移行にかかわる「トピックの持続性(Topic Persistence)」を指標に分析を行う。トピック管理の仕方を認知的側面から捉えることにより、明示的な説明が難しいトピック表現に大きくかわる「は」と「が」の使用の仕方について分析を行う。

3. 研究課題

本研究では、日本語学習者が作文談話において、どのようにトピックを維持し、どのように終結するかを認知的側面から量的に分析し、そこから得られた特徴を手掛かりに、母語別に談話内のトピックの流れ、談話構造を質的に分析する。具体的には先行研究の観点を参考に、主語名詞句を指示代名詞、指示詞+名詞句、完全名詞句という種類別にし、これらの主語名詞句が「は」で標示されて導入される場合と「が」で標示されて導入される場合で、「トピックの持続性(TP)」にどのような特徴が見られるか、またトピックの流れと作文の内容(文脈)がどのように関係しているか、以下の2つの研究課題を挙げ、学習者の母語別に調査を行う。

<1> 学習者の母語は、主語名詞句の種類(指示代名詞、指示詞+名詞句、完全名詞句)別にみて、助詞「は」及び「が」で標示された名詞句のトピックの持続性に影響を与えているか。与えているとしたら、どのような影響か。

<2> 学習者の作文において、指示表現の形式は、トピックの流れ、談話の構成にどのようにかわっているか。

4. 研究方法

4.1 データ

データは「作文対訳 DB(国立国語研究所)」²から、日本語学習者の母語として多い、英語、中国語、韓国語を母語とする執筆者の日本語作文を分析対象とした。また、ベースラインとして、日本語母語話者の作文も分析対象とした。Li & Thompson(1976)の主語とトピックのどちらが卓立しているかという分類では、英語は主語卓立型、中国語はトピック卓立型、韓国語は日本語と類似している主語・トピック卓立型である。野田(2004)では、トピック化の主な表現手段として、英語はトピックの後にポーズをおいたりイントネーションを利用したりする音声的手段、中国語は文頭にトピックをおき、語順によってトピックを標示する文法的手段、韓国語と日本語は助詞のような標識で標示する形態的手段が主に使用されるとしている。

「作文対訳 DB」から「あなたの国の行事について」をテーマとした作文を抽出し対象とした³。このテーマでは学習者は主に子どもの頃から現在まで心に深く刻み込まれた順序性(時系列性)のある経験、あるいは子どもの頃から聞いたり読んだりしてきた国の行事の起源とされる昔物語について述べている。したがって、作文内容は執筆者にとって大変身近で、内容的には認知的負荷は低いと考えられる。

抽出した作文数は、英語母語話者 22 本、中国語母語話者 43 本、韓国語母語話者 43 本、日本語母語話者 22 本で⁴、全て母語が話されている国⁵で採集されている。作文執筆者⁶には母語以外の言語を話す者もいるが、全ての執筆者が、母語とした言語で対訳作文を書いている。

作文の長さは、自由作文のため、日本語母語話者でも文字数にばらつきがある。表1はデータ作文の母語別平均文字数、最大文字数、最少文字数、標準偏差を示している。分散分析の結果、英語母語話者の作文の平均文字数は、中国母語話者、韓国語母語話者、日本語母語話者の平均文字数より、5%の水準で有意に短かった。

表1 作文データの母語別文字数

母語	英語	中国語	韓国語	日本語
平均文字数	474	646	612	681
最大文字数	770	923	853	807
最少文字数	357	343	252	368
標準偏差	95	136	165	105

4.2 分析方法

データの分析は、以下の①～⑥の手順で行った。

①データから主語名詞句を「は」で標示されている名詞句と「が」で標示されている名詞句に分けて抽出した。その際、先行研究を参考に、以下の6項目については分析対象外とした。()内はその理由である。

- ・「～ガ/ハ好き」のように対象を表わす「目的格(久野 1973)」。(主語名詞句を対象とする。)
- ・名詞修飾節内の主語、従属節内の主語で主節と異なる主語。(ハとガの使い分けに文法的制約が生じる可能性がある。)
- ・引用句内の主語名詞句。(引用部分が前後の文脈とは異なる文脈における談話である。)
- ・疑問詞。(照応がない。)
- ・否定文の主語名詞句。(文法的制約が影響する可能性がある。)
- ・一人称の主語名詞句。(書き手の存在として常に活性化状態あるいは準活性化状態の情報である。)

②「は」標示の名詞句、「が」標示の名詞句のトピック持続性(TP)値を測定する。本研究では、述語を一つ含み、主語-述語関係を中心とする文成分の集合を1節(clause)とした。ただし、名詞修飾節は形容詞や名詞による修飾語と同様に主語の一部としてみなし、節として計上していない。トピック持続性(TP)値は、後続する10節中に同一指示語が何回現れるかを節単位で測定した。同一指示語が省略されている場合も1として計上する。後続する10節中に同一指示語が1回も現れない場合をTP=0とし、したがって $0 \leq TP \leq 10$ となる。一つの作文に複数回同じ主語名詞句が産出されている場合は、最初に導入された名詞句のみを対象としてTPを測定した。その結果、本研究の分析対象となったのは、「は」標示の名詞句 744(英:116、中 344、韓 175、日 109)、「が」標示の名詞句 304(英:29、中 85、韓 116、日 74)である。

また、表現そのものが異なっても同じものを指す場合は同一指示語とみなし、逆に同じ表現でも指しているものが違う場合は、同一指示語として認めていない。数える際には、省略されている文成分も復元できるものは数えた。(1)は、「秋夕」チョンという韓国の伝統的なまつりが「が」標示で作文に導入され、それに続く 10 節中の TP を測定する例である。最後の3節は「秋夕では」が省略されていると考えられるため、TP=8 となる。トピックがどれくらい維持されるかはトピックの重要性を示すとされており(Givón, 1983 等)、(1)の部分で導入された「秋夕」チョンという韓国の伝統的なまつりは、この作文におけるトピックとして重要性が比較的高く、トピック性が高いことを示している。

(1) 毎年、陰暦の 8月15日になったら、／秋夕チョンという韓国の伝統的なまつりが あります／秋夕は 韓国の最大の伝統的なまつりで、／おおぜいの韓国人は 毎年 この日 を 待っています。／秋夕は 日本のおぼん、アメリカの収穫感謝祭などのような性格を持っています。／

特に 秋夕は ふるさとを去ってでかせぎをしている人たちがひさしぶりに帰郷をするとても特別な日です。／こんな帰郷行列を韓国では‘民族の大移動’と呼ばれています。／この現象は韓国人だけの他人の違って郷に關する郷愁がそのげんいんです。／秋夕では今年、収穫した、穀食を使って各種伝統の飲食を使います。／(秋夕では)また朝には先祖に対して、祭をします。／(秋夕では)また、ながいあいた見なかった家族たちが集まって、／(秋夕では)一日韓国の伝統ゲームをしながらすごします。／また、先祖の墓を訪れて、草むしりをしたり、墓の周辺*をそうじしたりします。～

(韓国語母語話者KR-111より一部抜粋)(「／」は節の終わりを示す。)

③抽出した名詞句を、完全名詞句、指示代名詞、指示詞+名詞句に分類し、それぞれについて、母語別にトピック持続性(TP)の値を算出し比較する。

④算出した値を比較する際、必要に応じて、ピアソンのカイ二乗検定、または t 検定を行う。多重検定になる場合はボンフェローニ補正を適用し、有意基準を厳しくする。

⑤量的分析結果に見られた特徴に基づき、作文の内容(文脈)とトピックの持続性の関係を質的に分析し、学習者の母語別にトピックの流れと作文構造について考察する。

5. 結果と考察

5.1 「は」標示の名詞句のトピックの持続性

「は」標示の名詞句のトピックの持続性(TP)値を名詞句の種類ごとに示すと表 2 のようになる。

表2 「は」標示の名詞句の種類別頻度と平均トピックの持続性値

母語 名詞句の種類	英語		中国語		韓国語		日本語	
	頻度	平均 TP	頻度	平均 TP	頻度	平均 TP	頻度	平均 TP
指示代名詞	2 (1.7%)	4.5	28 (8.1%)	0.9	12 (6.9%)	0.3	15 (13.8%)	3.8
指示詞+名詞句	5 (4.6%)	0.8	11 (3.2%)	1.1	5 (3.2%)	0.8	8 (7.3%)	1.4
完全名詞句	109 (94.0%)	1.9	305 (88.7%)	2.9	158 (90.3%)	3.1	86 (78.9%)	3
合計	116 (100%)		344 (100%)		175 (100%)		109 (100%)	

表2に示されているように、指示代名詞については、英語母語話者の作文では頻度が2(2つの指示対象はそれぞれ、TP=1、TP=8であった)であるため、平均的な値を示しているとはいえないので除くと、中国語と韓国語を母語とする学習者の平均TPが1未満であるのに対し、日本語母語話者は3.8と両者の数値が大きく開いている。具体的には、中国語母語話者の28例中17例(61%)、韓国語母語話者の12例中10例頻度(83%)の指示代名詞がTP=0であり、その文限りで終了し、トピックとして続いていない。一方、日本語母語話者は、TP=0の頻度は15例中5例(33%)である。

Givón(1995)は、TP値が0~2の場合はトピック価値が低いとし、TP>2であればトピック価値があるとしている。その基準で考えると、中国語と韓国語を母語とする学習者の「指示代名詞+は」は平均的にトピック価値が低く、日本語母語話者の「指示代名詞+は」は平均的にトピック価値が高いということがいえる。

なぜ中国語母語話者と韓国語母語話者の指示代名詞のトピック性が低く、日本語母語話者のトピック性が高いのか。中国語母語話者と韓国語母語話者の「指示代名詞+は」では、TP=0のほとんどが、(2)や(3)のように、直前に語られた内容全体の事態を受け、文章の最後のまとめとして使用されている。その後は、異なるトピックに移行している。

(2) [中国の苗族人の祭りについて] 私は苗族人了。／いぜん、私の父は苗族地区に住んでいました。／(中略:12節)／最後、客さんを連れに家の玄関に入って行まま、／特色がある苗族料理を食べます。／これは苗族
TP=0

族の迎える祭りです。 (中国語母語話者 CN-080)

(3) [釜山国際映画祭について] <前の行が空いて新段落>そしてある映画は俳優はもちろん映画監督と会うことができる。／映画に関心があるマニアは俳優と監督に合うために、他都市から来る場合もある。／すばらしい映画とえらい俳優と監督に会って、／運がよければ俳優と監督に質問する機会があるかもしれない。／これはすばらしい思い出になるでしょう。
TP=0

(1行空く)

そして劇場が集中している南浦洞の～ (韓国語母語話者 KR-114)

それに対し、日本語母語話者は文章の(2)や(3)のような最後のまとめ機能以外に、(4)のように説明の導入にも「指示代名詞+は」が用いられ、「おはぎ」のような名詞を指示する用法に用いられている。

(4) その時に欠かせない食べ物、日本の伝統的な菓子の「おはぎ」である。／それはもち米を炊き軽くつぶ
TP-2

して丸めたものに、あんまたはきなこをまぶしたもので、／(それは)先祖の霊にお供えするものである。／今では、
(それは)一般的な和菓子の一つになっている。／ (日本語母語話者 JP-25)

(2)(3)(4)の指示代名詞は全て文脈指示の用法であるが、(2)と(3)は指示対象が一つのまとまりある内容全体であり、(4)は「おはぎ」という一つの名詞が指示対象である。このことから中国語と韓国語を母語とする学習者と日本語母語話者の平均 TP に大きな差が見られた一つの要因として、指示代名詞の習得段階が反映していることが考えられる。指示代名詞の文脈指示用法では、コ・ソ・アの使い分けが上級レベルに至っても十分な理解と習得が難しいとされている(森塚, 2003)。指示代名詞の指示内容として、ある程度の長さの内容全体の事態を対象とすることは、自分の述べてきたことを自分でまとめるという活動であり、自らの視点で指示することができる。一方、(4)のように名詞一つを指示する指示代名詞は、特定の談話の中での書き手と読み手の視点を考えてコ・ソ・アを選択しなければならず、その難しさから使用が回避されている可能性が考えられる。使用頻度も日本語母語話者の割合が学習者より高いことが示されている。またもう一つの要因として、中国語と韓国語の談話スタイルにおいて、指示代名詞の主な機能が内容のまとめであるという可能性も考えられるが、この点については、韓国語と中国語による作文談話との比較が必要であり、今後の課題としたい。

次に特徴が見られたのは完全名詞句の平均 TP である。英語母語話者の TP 値のみ、他の母語の学習者、及び日本語母語話者と比較して有意に低い(各母語話者とも1%水準で有意差あり)。それぞれの母語話者の完全名詞句のTP値の分布がどのようにになっているかを分析すると、表3のようになる。英語母語話者は、TP=0~1が69.7%であり、ほぼ7割の完全名詞句のトピックが1節か2節しか続いていないことがわかる。中国語、韓国語を母語とする学習者群、及び日本語母語話者は約50%がTP=0~1であり、近似の値を示している。また、中国語、韓国語を母語とする学習者群、及び日本語母語話者のTP=10が11~16%と似た値を示し、TP=0~1の次に頻度が高いのに対し、英語母語話者はTP=10の頻度の割合が4.6%であり、トピックが長く維持されることが比較的少ないことが示されている。それぞれの母語の学習者と日本語母語話者の頻度5以上あるTP値を対象にカイ二乗検定を行ったところ、英語母語話者と日本語母語話者では、TP=10で5%の水準で有意差あり、日本語母語話者のほうが頻度が高かった。英語母語話者の作文では日本語母語話者と比較し、TP=10となる連続的に使用されるトピックは頻度が少ないことが示された。

表3 母語別にみた「は」標示の完全名詞句のTP値の分布

母語	英語		中国語		韓国語		日本語	
	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)
TP 値								
0	51	46.8	113	37.0	40	25.3	30	34.9
1	25	22.9	45	14.8	39	24.7	14	16.2
2	7	6.4	31	10.2	23	14.6	6	7.0
3	7	6.4	16	5.2	6	3.8	13	15.1
4	2	1.8	14	4.6	8	5.1	1	1.2
5	2	1.8	14	4.6	5	3.2	2	2.3
6	2	1.8	17	5.6	6	3.8	3	3.5
7	2	1.8	14	4.6	4	2.5	1	1.2
8	6	5.5	1	0.3	1	0.6	2	2.3
9	0	0.0	6	2.0	1	0.6	2	2.3
10	5	4.6	34	11.1	25	15.8	12	14.0
合計	109	100	305	100	158	100	86	100

英語母語話者の平均 TP 値が低くなる特徴として、全体のテーマとなる指示対象は TP 値が高いが、脇役的な指示対象として TP が低いものが次々に導入されていることが挙げられる。(5)は「アメリカの卒業式」というタイトルの英語母語話者の作文の冒頭部分である。「高校の卒業式」とその下位にある「学生」はこの作文のテーマとして最後まで言及され、トピック値が高い。しかし、その途中で、オーケストラ、学長、司祭、先生たち、作曲家、家族と友達というさまざまな人物や、歌、卒業証書、写真という人物以外の指示対象が次々に「は」標示の名詞句として導入されている。そのため、作文の内容としてはアメリカの卒業式を時系列で説明していてまとまっているが、一つのトピックがほとんど維持されることなく、次々に導入される形となっている。

(5) 私の生れたところがハワイだから、高校の卒業式はかなり特別だったと思います。／まず、学生は伝統的なせいそうではなくて／ちがうのふくをきます。／女の人は白いドレスをきて／男の人はスーツをきます。

ぎしきの時、学生はステージに歩くにつれて／高校のオーケストラは「ボンブアンドサケムスタンス」と言う歌をえんそうします。／その歌は卒業式で伝統的にえんそうされます。／みんなの学生はすわる後で／高校の学長はスピーチをして／学生をいわいます。／それから、高校のしさいはいのいをもとめます。／～

(英語母語話者、US-9)

5.2 「が」標示の名詞句のトピックの持続性

「が」標示の名詞句のトピックの持続性(TP)値を名詞句の種類ごとに示すと表4のようになる。指示代名詞、指示詞+名詞句の頻度がどの母語話者も低く(0~4.3%)、平均値として比較するには無理があるため、完全名詞句について分析を行った。「完全名詞句+が」の平均 TP 値を見ると、学習者群は母語にかかわらず TP=2前後であるのに対し、日本語母語話者は TP=1.3 と低い。

表4 「が」標示の名詞句の種類別頻度と平均トピックの持続性値

母語	英語		中国語		韓国語		日本語	
	頻度	平均 TP	頻度	平均 TP	頻度	平均 TP	頻度	平均 TP
指示代名詞句	1 (3.4%)	0	1 (1.2%)	1	2 (1.7%)	4	2 (2.7%)	3
指示詞+名詞句	1 (3.4%)	1	0 (0.0%)	-	5 (4.3%)	1.4	2 (2.7%)	0.5
完全名詞句	27 (93.1%)	2.1	84 (98.8%)	1.9	109 (94.0%)	1.7	70 (94.6%)	1.3
合計	29 (100%)		85 (100%)		116 (100%)		74 (100%)	

そこで、母語別にみたTP値の分布を分析し、表5に示した。母語にかかわらず、TP=0~1の頻度が高くなっている。カイ二乗検定にかけたところ、全ての母語の学習者と日本語母語話者の間に有意差は見られなかった。このことは、日本語母語話者だけでなく、学習者にとっても「が」標示の名詞句の多くは1~2節で終わることを示している。しかし、前節でもみたように、英語母語話者は「は」標示の名詞句も「が」名詞句と同程度にTP=0~1の頻度が高い。そのため次節では、「は」標示の名詞句と「が」標示の名詞句を比較する。

表5 母語別にみた「が」標示の完全名詞句のTP値の分布

母語	英語		中国語		韓国語		日本語	
	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)	頻度	割合(%)
0	13	48.1	40	47.1	56	51.4	38	54.3
1	6	22.2	14	16.5	17	15.6	15	21.4
2	2	7.4	8	9.4	11	10.1	3	4.3
3	0	0.0	10	11.8	6	5.5	6	8.6
4	1	3.7	3	3.5	5	4.6	2	2.9
5	1	3.7	0	0.0	4	3.7	1	1.4
6	0	0.0	3	3.5	1	0.9	1	1.4
7	0	0.0	0	0.0	3	2.8	1	1.4
8	0	0.0	1	1.2	0	0.0	0	0.0
9	2	7.4	1	1.2	1	0.9	1	1.4
10	2	7.4	5	5.9	5	4.6	2	2.9
合計	27	100	85	100	109	100	70	100

5.3 「は」標示と「が」標示の名詞句のTP値の関係

「は」標示と「が」標示の完全名詞句の平均TP値の関係を母語別に比較すると、図1のようになる(表2と表4も参照)。中国語、韓国語を母語とする学習者、日本語母語話者の「は」標示の名詞句のTP値は3前後であり、「が」標示の名詞句より有意に高い(有意水準は、中国語母語話者 1%、韓国語母語話者 0.05%、日本語 0.1%)。このことは、談話において、中国語と韓国語を母語とする学習者、及び日本語母語話者は、「は」標示の名詞句の方が、「が」標示の名詞句より、トピックとして持続性が高く、重要度が高いトピックとして認識されていることを意味している。英語母語話者はハ名詞句のTP値が1.9と、他の母語の学習者や日本語母語話者より低く、ハ名詞句の

トピックがあまり長く続いていないことを示し、「は」標示の名詞句と「が」標示の名詞句の TP 値には有意な差が見られなかった。

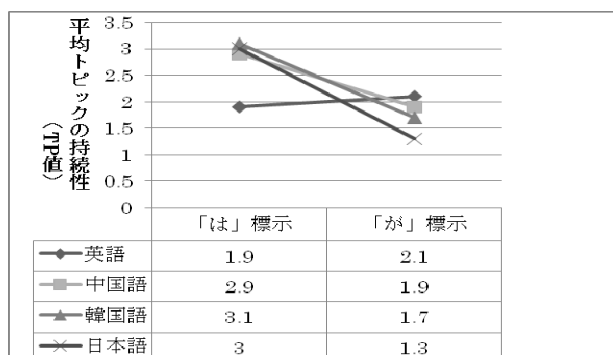


図1 完全名詞句におけるハ名詞句とガ名詞句のトピックの持続性値

更に母語別に「は」標示の名詞句と「が」標示の名詞句で頻度が5以上あるものにつき、TP 値ごとの頻度差をカイ二乗検定で確認したところ、韓国語と日本語を母語とする執筆者では、TP=0 で有意に「が」標示の名詞句のほうが頻度が高いことが示された(韓国語母語話者は有意水準 0.1%、日本語母語話者は有意水準 5%)。つまり、韓国語と日本語を母語とする執筆者は、「完全名詞句+が」で導入した名詞句は、その節で終結することが「は」標示の名詞句より多く、「は」標示の名詞句のほうが「が」標示の名詞句よりトピック性が高いことが示された。

TP>2 がトピック価値があるという基準に照らすと、英語と中国語を母語とする学習者にとっては、「完全名詞句+が」のトピック価値は有無の境界にある。韓国語母語話者の「が」標示の名詞句は平均的にはトピック性がやや低く、日本語母語話者のトピック性は4者の中で最も低い。また、英語を母語とする学習者は、「は」標示、「が」標示の名詞句ともに完全名詞句の平均的なトピック価値は同等であることが示唆されている。本研究の対象とした英語母語話者の作文の分析結果は、中浜(2009)のインタビュー結果を支持しており、主語の「が」と主語をトピック化した際の「は」を区別しないで使用されることが多かったのではないかと推測される。

5.4 結果のまとめと考察

英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者、及び日本語母語話者の作文におけるトピックの持続性を分析した結果、以下のようなことが示された。

- (1) 「指示代名詞+は」の形式による指示表現は、日本語学習者は日本語母語話者ほど使用していない。特に英語母語話者は使用頻度が低かった。また、中国語と韓国語を母語とする学習者の TP 値は、日本語母語話者より有意に低く、トピック性が低いことが示されている。
- (2) 「完全名詞句+は」の形式による指示表現は、英語母語話者ではトピックの持続性の平均値が低く、特に TP=10 のように作文のかなりの部分を占めるような、重要度が高いとみなされるトピックは頻度が少なかった。英語母語話者にとって「完全名詞句+は」はトピック性が高いとはいえない。
- (3) 「完全名詞句+が」と「完全名詞句+は」の TP 値を比較すると、中国語、韓国語を母語とする学習者、及び日本語母語話者は、「完全名詞句+は」のほうが有意に TP 値が高く、「完全名詞句+は」のほうがトピック性が高い。

いと認識されていることが示された。英語母語話者には「は」標示と「が」標示の名詞句に TP 値の有意な差は見られず、「は」と「が」は区別されずに使用される傾向が示唆されている。

- (4) 韓国語母語話者と日本語母語話者では、TP=0 というその節で終結する頻度が、「完全名詞句+は」より「完全名詞句+が」のほうが有意に高く、「が」標示の名詞句がその節で終わることが「は」標示より多いことが示された。

「指示代名詞+は」では、指示代名詞の習得段階も影響している可能性があるため、「完全名詞句+は」と「完全名詞句+が」に焦点をおいて母語別に比較すると、中国語、韓国語を母語とする学習者は、「は」標示の名詞句をよりトピック性が高い指示対象として意識していることが示され、更に韓国語母語話者は「が」標示の名詞句が日本語母語話者同様、その節で終わることが「は」標示の名詞句より多い。したがって、韓国語を母語とする学習者は、指示対象のトピック性と「は」と「が」の使用の関係が、日本語母語話者のパターンに最も近いといえる。韓国語は類型論的にみると、主語・トピック卓立型で助詞のような形態的手段でトピックを表現する言語であり、正の転移の可能性もある。また、中国語母語話者もやはり「は」標示の名詞句が「が」標示の名詞句よりトピック性が高いことが認識されている点では、日本語母語話者のトピックの持続性と表現形式の関係を把握していたといえる。トピックの持続性が「は」と「が」に表示された指示対象との関係において、日本語とパターンが最も離れていたのは英語母語話者の作文であった。英語は主語卓立型の言語であり、左方転移など有標のトピック表現もあるが、最も多いのはアクセント等の音声による表現であり、形式的な特徴がないことが多い。また、定・不定の概念が冠詞によって表現されるが、情報の新旧にかかわっているという点では「は」と「が」に似ているものの、日本語の「は」「が」に対応しているわけではない。そのため、「は」と「が」の使用の手がかりを見出すのは難度が高い習得になると考えられる。

以上のような母語の影響が量的分析で見出された。これらの母語の影響が作文の談話にどのような影響を与えているか、英語母語話者については、(5)に、短いトピックが「は」標示の名詞句によって次々に導入される例を示した。また英語母語話者の作文では、「は」標示しか使用されていない作文が 22 作文中 8 作文(36%)あり、「が」標示を使用している作文も、1作文内での頻度は非常に低いことから、「は」による主語名詞句の導入が全体的に非常に多い(42節を参照のこと)。

中国語母語話者の作文も「は」標示しか使用されていない作文が 43 作文中 12 作文(28%)あり、「は」と「が」を使用している作文においても、1作文内で「が」標示の頻度は少なく、「は」の使用が多い(42節を参照のこと)。(6)は中国語母語話者の「中国の新年」という作文の冒頭である。最初の3文では「歴史」、「中国人」、「中国のお祭り」が次々に「は」標示で導入される。この中で、「歴史」は TP=0 であり、トピックとして維持されておらず、トピック性が低い指示対象である。一方、タイトルからわかるようにこの作文は中国の特徴を説明しようとしているため、「中国人」「中国のお祭り」は意味的にもトピック性は高いといえる。「中国人」、「中国のお祭り」は「は」で導入されても違和感がないが、「歴史」については「歴史が」と「が」標示で導入したほうが日本語母語話者のパターンに近いといえる。しかし、11節目の「赤い色が」、14節目の「笑う声」はどちらも TP=0 であり、「歴史」同様、その節限りの指示対象であるが、「が」標示となっていて、日本語母語話者のパターンに一致している。このように、中国語母語話者の作文では、「は」の過剰使用が見られるが、「は」と「が」が全く区別されていないわけではない。

- (6) 中国は世界中の文明で古い国で、歴史はとても長いです。／中国人は一番勤勉で勇敢な人民です。／中国のお祭りは非常に多いです。／中秋節や重陽節や元旦など、たいへん賑わっています。／

新年は一年中の一番重要なお祭りで、中国人に「春節」と言う美しい名前を呼びられて、農歴の二日に春になるとき過こすからです。過しかたは地方によって違います。北の方は餃子を食ったり、花竹につけたりするのが潔気に溢れていて、赤い色がいっぱいです。南の方は花をかったり、団子を食ったりして、どこでも笑う声がします。／～
(中国語母語話者、CN-073)

韓国語母語話者の作文では、TP 値は日本語母語話者と近似のパターンを示している。(7)は韓国語母語話者の「ソルナル(旧正)」というタイトルの作文の一部、(8)は日本語母語話者の作文の一部である。(7)の作文では、「韓国のお正月」というテーマのもとで、お正月に行われるさまざまなイベントが語られるが、そのイベントの動作主たちは「が」標示の主語名詞句で導入されていく。(8)は夏祭りのうち、「みこしや山車」が「が」標示で導入され、その直後から「みこし」と「だし」がトピックとして「は」で標示されていく。そしてみこしや山車の一部である「飾りつけ」や「車輪」、山車に乗る「小学生～大人の人たち」が「が」標示で導入されている。(7)(8)ともに、一貫したテーマが「は」で標示され、その下でのイベントの動作主や、意味的にテーマとなる指示対象の一部分にあたるものが「が」標示で導入されるというように、「は」と「が」が異なる談話機能で、作文の構成にメリハリをつけていることがわかる。

(7) 韓国のお正月は茶礼とともに新しい年を迎えます。／正装に身をかためた一家の男たちが位牌の前に集まって、／祖先の霊を供養するのが茶礼です。朝早く起きて‘ソルビム’すなわち新年の晴れ着に着替えた家族たちが集まって、／そろって茶礼を行うのです。／
(韓国語母語話者、KR-31)

(8) [夏祭りについて]夏祭りでは何が行われるのかというと、まず、みこしや山車が出ます。／みこしは皆でかつぐ箱のような物で、ユニークな飾りつけがしてあり、／山車はみこしより数倍大きく、／車輪がついていて／皆で引いて移動するのです。／また、山車には小学生～大人の人たちが乗っており、／横笛を吹いたり／太鼓をたたいたり／鈴を鳴らしたり／踊ったりもしています。／それらを祭りに来ている人々に披露するため、／みこしや山車は町内をめぐるのです。／山車から流れてくる笛や太鼓の音は、人々の心を躍らせ、／祭りの楽しい雰囲気を作りだします。／
(日本語母語話者、jp-18)

6. 今後の課題

本研究では、母語の異なる日本語学習者と日本語母語話者の作文談話の構成を「トピックの持続性」という指標を用いて分析した。量的な指標を使用することで、無限にある文脈を対象として傾向を把握することができ、特徴のみられた点を中心に、文脈とのかかわりを質的に観察することができた。その結果、学習者の母語の類型論的違いが、「は」標示と「が」標示の主語名詞句のトピックとしての重要性に影響を与えていること、それが談話におけるトピックの流れ、談話の構成にも影響を与えていることが示された。大きいテーマの下でのトピックの流れ、すなわちテーマとトピックの関係を「は」と「が」による標示によって区別して表現することが、日本語として理解しやすい文章になると考えられ、一つの手掛かりとして提示できると考えられる。この手がかりと母語の影響に基づき、今後の日本語の作文指導に活かしたい。

ただし今回のデータでは英語母語話者の作文の文字数が有意に短かく、日本語能力も厳密に統一できなかった。今後の課題として、対象者の日本語能力レベルを統一したデータを用いたり、縦断的データを用いたりするなど、日本語能力や習得プロセスも視野に入れた分析をしていきたい。

注

1. Sasaki(1997)では‘Decay’という語が使用されているが、TPと同じ指標を指す。
2. 国立国語研究所日本語教育基盤情報センターが作成した「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース/日本語学習者による日本語発話と、母語発話との対照データベース/作文添削システム XECS」を利用した。
3. 「作文対訳 DB」にはいくつかの共通したテーマが設定されている。
4. 韓国語母語話者の作文以外は、DB 中で条件を満たすもの全てである。韓国語母語話者の作文は数が多かったため、最も数の多い中国語母語話者の作文数と同数をランダムに選出した。
5. 英語はアメリカ、シンガポール、中国語は中国、韓国語は韓国、日本語は日本である。
6. 対象とした学習者の日本語学習期間の平均は、英語母語話者が 31 カ月、中国語母語話者 15 カ月、韓国語母語話者 24 カ月である。

参考文献

- (1) 久野暲(1973)『日本文法研究』東京:大修館書店
- (2) 柴谷方良(1989)「日本語の語用論」北原保雄編『講座日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体(上)』、東京:明治書院、pp.388-410.
- (3) 中浜優子(2009)「タスクの複雑性、母語、日本語能力が談話構成に及ぼす影響—指示表現・受身表現の使用について—」、*JALT Journal*, Vol.31, No.1, May, 2009, 101-120.
- (4) 野田尚史(2004)「主題の対照に必要な視点」、益岡隆志編『主題の対照』(pp.193-213)、東京:くろしお出版
- (5) 森塚千絵(2003)「日本語の指示詞コソアとその習得の概観」『言語文化と日本語教育』2003 年11月増刊特集号、51-76.
- (6) Chafe, Wallace L. (1993). Prosodic and functional units of language. In Jane A. Edwards and Martin D. Lampert (Eds.), *Talking data: transcription and coding in discourse research* (pp.33-43). NJ: Lawrence Erlbaum associates.
- (7) Givón, T. (1983). Topic continuity in discourse: an introduction. In T. Givón (Ed.), *Topic continuity in discourse: a quantitative cross-language study* (pp.5-41). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- (8) Givón, T. (1984). Universal of discourse structure and second language acquisition. In William E. Rutherford (Ed.) *Language universals and second language acquisition* (pp.109-139). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- (9) Givón, T. (1995). *Functionalism and grammar*. Amsterdam: John Benjamins.

- (10) Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1976). Subject and topic: A new typology of language. In: Charles N. Li (Ed.), *Subject and topic* (pp.457-489). UK: Academic Press.
- (11) Myhill, John (1992). *Typological discourse analysis: Quantitative approach to the study of linguistic function*. MA: Blackwell.
- (12) Odlin, Terence (1989). *Language Transfer*. UK: Cambridge University Press.
- (13) Sasaki, Miyuki (1997). Topic continuity in Japanese-English interlanguage. *IRAL*, 35/1, 1-21.